
碧眼と誓いの旅

Traitor

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧眼と誓いの旅

【Nコード】

N8615I

【作者名】

Traitor

【あらすじ】

過去最悪とまで謳われ、世界に変革をもたらした大戦争——『魔術戦争』の終結から早七年。世界の国々は、戦前まで崇められていた『魔術師』たちを一転、悪魔と称し迫害に至るようになった。戦争の英雄であり『魔術師』でもあるレオンは、その名声がゆえに特別な待遇を許されたが、同志の迫害に納得がいかなかった。彼らを救う手立てを色々と思案するも、結局国の方針は変わらない。そんなある日、レオンは些細な事件に偶然出くわすことになった。そして、そこで彼は碧眼を持つ一人の少女に出会ったのである——

第一章 ？（前書き）

感想や評価をいただければ光栄です。

第一章？

「あなたは間違っている」

レオンは堂々と言明した。

居館の大広間。騎士たちの宴会場としても使われるこの広間の壁には、馬を駆る騎士たちの姿など、勇敢さを描く様々な絵画が飾られている。壁際には騎士の剣や盾が並べられ、天井には銀製のシャンデリアが吊るされていた。その見るからに豪勢な内装は、城主の力の強さを如実に表している。

その城主——ヴァステイリア王国の国王と、レオンは対峙していた。

「『彼ら』が迫害される理由などありません。あなたは間違っています」

静かに訴えるレオンの声は、強固な意志をもって広間内に強く響いていた。しかし、国王は何ひとつ表情を変えぬまま、真っ直ぐに彼の目を見据えている。

「なぜです。あなたは自身の過ちに気がついていないのですか？」

「おい貴様！ 先程から国王に向かってなんだその態度は！」

不意に怒号を上げたのは、おそらくは側近と思われる、国王の傍らに佇んでいた初老の男だった。彼は怒りの形相になって、レオンを睨みつける。

反射的にちらりと彼を窺ったレオンは、向けられた鋭い視線に怯むこともなく、

「あなたには、関係のないことです」

毅然とした態度で一蹴した。

「貴様……！」

業を煮やした彼は絞るような声を漏らすと、腰に下げられていた剣の柄に手を添えた。それを受けて、レオンに付き添っていた数人の騎士たちの間にも緊張感が漂う。

「やめる」

しかし、国王の一言によって険悪な雰囲気は途端に払拭された。はっと我に返った側近の男だったが、目の前にいる若男の不躰な態度にやはり苛立ちを覚えたのか、「しかし……」と精一杯の反論を試みる。

それでも国王は表情を一切変えず、

「城内での不用意な抜剣は許されないことだ」

静かに、だが有無を言わせぬ圧倒的な迫力をもって告げた。側近の男もさすがに観念したようで、未だ癪を孕んだ目を向けつつも沈黙を貫いていた。

「それでだ、レオンくん」

国王が、再び彼の目を捉える。

「君の用件は、『彼ら』の解放ということだったかな？」

確認のためか、国王は改めて彼の要求を口にした。レオンは小さく頷く。

「そうか——」

そう言うつと、国王は何か勿体ぶるように深い息を漏らした。レオンは息を呑み、続く言葉に耳を傾ける。

「——残念だが、その要件を呑むことはできない」

揺るぎない断言。レオンは下唇を噛み締め、湧き上がる怒りを押し殺した。

「無論、君の気持ちもわかる。同志が捕らえられ、監禁されることは君にとっても耐え難いことだろう。しかし、仕方のないことだ」

「……仕方がない？」

レオンはつとめて平静に、だが普段以上に低い声で聞き返す。

「そうだ。『彼ら』は危険極まりない存在だ」

「ですから、その認識が間違っていると私は言っているのです」
引き下がるわけにはいかない。レオンの眼光に、一層鋭さが増した。

「『彼ら』は危険な存在ではありません。単に生まれながら、少々

特別な力を持っているだけのことです。現に、『彼ら』はあの戦争で国のために戦いました。国に忠誠を誓って、です。その意志を、自由を、あなたは自分の勝手な都合で奪うつもりですか？」

「確かに、『彼ら』はかの戦争で大いに貢献した。それには私も感謝している。しかし、戦争が終わり一時の平和を手にした今となつては、『彼ら』の力は危険以外の何ものでもない。放置しておけばいずれ新たな戦争の口火となる恐れもある。これからの国の平穩を考えても、これは仕方のない——いや、当然の処置だ」

「では、あなたは『彼ら』を使うだけ使って、捨てたということですか？」

「結果として言ってしまうえば、そういうことになる」

あまりの残酷な言葉に、レオンは二の句が継げなかった。国王は、『彼ら』を人として見ていないのではないだろうか。そんな疑念さえ抱く。

「それに、そのことは君が一番わかっているはずだ。その力がどれほどの脅威を持っているのか。どれほど危険なものか。だからこそ、君は力を封印したのだろうか？」

レオンの顔に苦渋の色が浮かんた。その話を持ち出されると、言い返せない。

「もちろん、我々としても『彼ら』を牢獄の中で野垂れ死ににさせるつもりはない。手を打とうとは努力している」

「努力……その結果が、あの呪いの術式ですか？」

「語弊があるな。あれは呪いではない。『彼ら』を救う唯一の手段だ」

「ですが、未だ成功例はないと聞いています」

途端、国王の表情が歪んだ。

「……そこまで知っているのか。まあいいだろう。しかし、結果がすべてではない。確率の問題だ。『彼ら』の運が悪かったと言っしかあるまい」

「運……だって？」

信じられない、というような目付きでレオンは国王を見る。

「人生が、運の良し悪しだけで決まる？ あなたはそれでいいのですか？ そんな馬鹿げた理由で、簡単に人の命を奪ってもいいと思っっているのですか？」

「他に方法がないのだから、やむを得ないのだ。国の平穩には代えられない」

レオンは愕然とした。もはや呆れるしかない。

「さて、もういいだろう。君がいくら訴えたところで、この方針は変わらない」

国王はきつぱりと言い切った。

「それに、我々としても君には寛大な処置を施したつもりだ。無論、それは君の名誉を考慮してのことだが、これ以上文句を言いつけるつもりなら、私としても看過できなくなる。身を滅ぼしたくなければ、以後から気をつけることだ」

すでに言い返す気力さえも残っていなかった。

「あの、国王……」

レオンが付き添いの騎士たちと共に広間から出て行っただのを見計らって、側近の男は小さく口を開いた。今、大広間には国王と彼の二人だけが残っている。

「どうした」

「つかぬことをお聞きしますが、彼は一体——」

「ああ、君は知らなかったのか」

先程とは打って変わった穏やかな口調で、国王は言う。

「しかし、聞いたことくらいはあるだろう。かの戦争で、まだ幼い一人の少年が、精鋭部隊隊長として猛威を振るった話を」

「まさか……」

「ああ、そのまさかだ」

側近の男は目を見開き、驚きを露わにした。

「彼こそが、あの最強とまで謳われた我が国の英雄だ。そして——」

「国王はそこで一呼吸入れ、一転して厳かに告げた。
——彼も『彼ら』と同じ、『魔術師』だ」

第一章？

城門を出た途端、白昼の陽光が容赦なく突き刺さってきた。

空を見上げたレオンは、あまりの眩しさにすっと目を細め、手を翳す。

文句ない快晴であった。雲ひとつ見当たらず、透き通るような青が空全体を覆っている。九天で輝く太陽は、普段よりも一層強い光を放っているようだった。

しかし、その晴れやかな青空を見て、レオンをふっと溜め息を漏らした。

どうして、わかってくれないのだろうか。

予想していたとはいえ、それ以上に国王の意志は固いようだった。このままでは『彼ら』の解放——その実現は困難どころか、不可能に近い。どうにかしなければ、とは思うものの、今のレオンには訴えることが精一杯の行動だった。そして、その訴えさえも通らなかつたのだから、もはや手に負えない状態である。これ以上の抵抗も無意味だと思われた。

跳ね橋を渡ると、眼前に街の広がりが見えてくる。跳ね橋の先には、街と城を結ぶ細長い階段が設けられているため、その手前、この位置からは街の様子が一望できるのだ。階段を下りれば、すぐさま商店街の端に出られる。

レオンの住むこの街は、世界有数の有力国家——ヴァステイリア王国の首都、ルブランドである。大陸の南東を占めるヴァステイリア王国、その領土全域は丘陵地帯となっており、ルブランドはその隅、沿岸部に亘って大きく展開されている。その特異な地形がゆえ、他国からの干渉は少なく、現在、国は独立して安定した平穩を維持していた。

階段を降りたレオンは、その足取りのまま商店街の中を進んでいく。

賑わう商店街。その雑踏の大半を占めているのは、日々商売に精を尽くす商人たちだった。店先でたむろする彼らは、互いの情報を交換し合ったり、他愛もない話で盛り上がりたりしている。中には、荷馬車に乗った行商人や、狩った獲物を縄で括りつけ肩から下げる狩人、教会へと向かう修道女などの姿も目に入った。

そんな日常の当たり前な光景——しかし、それはかの戦争が終わり、国が安定期を迎えた今でこそ見られるものだった。

十年前に起こり、約三年間にも続いた大戦争。人々はそれを『魔術戦争』と呼ぶ。

発端は、いかなる国家の領土ともなっていない大陸の最南部、遺跡群と呼ばれる地域で発見された、一冊の『魔術書』だった。そこに記された恐るべき内容が発覚すると、世界の国々は我先にとその一冊を求め、結果として約三年間、ひたすらに戦闘を繰り返すことになったのである。

そして七年前、終戦のきっかけともなる、ある事件が起き——

「……なんだ？」

ふと、レオンが立ち止まった。呟いた疑問の先は、商店街の奥にある広場に向いている。

街の中心である広場は、全体が大きな円形を描いている。そこから商店街はもちろん、協会や居住区などに続く道が分岐して延びていた。いつもは賑やかさに溢れ、行き来する人々が淀みなく流れているはずなのだが——

今ばかりは人々は足を止め、広場の中央に大きな人だかりができていた。普段の喧騒は微かなざわめきとなり、広場全体が奇妙な緊張感に包まれている。

「何かあったんですか？」

レオンは、広場の手前で人だかりの様子を眺めていた男に声をかけた。

「ああ、俺もよくわからないんだが、——っ！」

振り返った男はレオンを見て、一瞬、身体をびくりと震わせた。

レオンの風体だった。彼は、全身をほぼ真っ黒に染め上げた格好をしている。黒いコートを身に纏い、下には黒いズボン、黒い靴を履いている。さらに、腰には黒拵えの鞘に収められた一本の刀剣が、これまた黒いベルトによって吊るされていた。そして、宗教上において黒はすなわち『死』を意味している。そのため、教会の者はもちろん、一般市民でも黒一色で揃えることは不吉とされ、あまり好まれていない。そんな見るからに怪しげな男が突然話しかけてきたのだから、驚き恐れるのも当然の反応であった。

そのことを悟ったレオンは、思わず自嘲を込めた笑みを口元に刻む。

「いえ、何か事件でも起こったのかと思ひまして」

改めて丁寧に聞いてみると、男はふっと安堵したように胸を撫で下ろした。

「いや、俺も詳しくは知らないんだが、何やら男二人が口論してるみたいなんだ」

「口論……ですか？」

「ああ。原因は知らないが、今にも——」

そのとき、人だかりの奥から怒声が響き渡った。若い男の声だ。

次いで、鞘から剣を抜く鋭い金属音が耳に届く。途端、辺りにどよめきが生まれた。

「……まずいな」

レオンは呟くと同時に、走り出していた。体に染みついた正義感、いや彼にとってはすでに当たり前となった感情が、自然と体を動かす。黒靴が地面を蹴り叩き、疾駆の流れがコートをなびかせる。据えられた両目は、しかと前方を捉えていた。

「避けてください！」

「おい、誰か来たぞ！ 道を開ける！」

レオンの声にいち早く気がついた市民の一人が、大声で周囲に呼びかけた。

「助けが来たのか？」

「誰だ？ 騎士団の者か？」

「いや、あの格好は……」

口々に声を漏らし、好奇の目を向けてくる市民たちを振り切つて、レオンは開けられた人壁の道を一気に駆け抜けた。そこには――

「なんだと！ もう一度言ってみろ！」

二人の男が対峙していた。そのうちの一人が剣を握り締め、もう片方を牽制している。二十代後半くらいだろうか。剣を持った男は、ほつれの目立つ粗末な上着に履き古したズボンを身につけ、血走つた目で相手方を睨みつけている。

「ああ、何度でも言つてやる――」

対する男も、棘のある強い口調で言い返していた。こちらは真新しい絹の衣服を着ており、見るからに稼ぎのいい商人とわかる格好である。歳は見てくれで四十代半ば、その腰に剣はなく、向けられた刃には警戒しているが、強気な態度を崩す気配はなかった。

「お前は悪魔の子だ」

「てめえええええええええっ！」

途端、若男の方が動物の咆哮にも似た叫び声を発した。柄を握る両手に、さらに力が込められる。剣先が震える。色をなす憤怒の形相。

そのまま、彼は剣を大きく振り上げ――

「あなたたち、何をしているのですか！」

すかさず、レオンが割つて入った。

間一髪、若男は剣を振りかぶった姿勢のまま、ぴくりと動きを止める。そのまま振り向いた彼の相好は怒りに染まり、充血した目は大きく見開かれていた。

「なんだてめえ！」

狂うような怒号が、空気を震わす。

「剣を収めなさい。街中での抜剣は禁止されているはずですよ」

レオンはつとめて冷静に対応する。しかし――

「なん、だ……てめえも俺を侮辱するのか！」

「違います。剣を収めなさいと言っているだけです」

「ふざけるな！ 何がいけない！ なぜ否定されなきゃいけないんだ！」

レオンの言葉に耳を傾けようとしめない。完全に我を失っているようだった。

「なぜだ！ なぜ親が『魔術師』ってだけで馬鹿にされる！ 避けられる！ 『魔術師』が、俺の父が何をしたっていうんだ！」

『魔術師』——その言葉に、レオンははっと息を呑んだ。次いで、耐え難い苦しみと悲しみが、怒りと共に胸に押し寄せてくる。なぜ——その疑問が、彼の心を再び締めつけた。

——彼も犠牲者だったのだ。

「黙れ！」

突然、先程まで彼と口論をしていた中年男が大声を上げた。

「『魔術師』が何をしたって？ あいつらが何人の命を奪ってきたと思っただ！ 現に、俺はあいつらに妻を殺された！ 殺されたんだ！ 悪魔なんだよ！ 迫害して当然だ！ お前らに、俺の気持ちがあったたまるか！」

一気にまくし立て、彼は荒くなった息遣いを整える。鬱憤を吐き出したその顔は真っ赤に染まり、双眸からは涙が浮かび上がっていた。

「ふざけんな！」

しかし、若男にその訴えは意味を成さない。『魔術師』を親に持つ者と、『魔術師』を恨む者。決してわかり合えることのない、相容れぬ関係。必然の対立なのだ。

「死ねええええええええええ！」

彼はたけるような絶叫を上げながら、再び剣を高々と振りかざした。

どよめく群衆——その中で、レオンは即座に反応していた。

油断のない、神速の動き——

若男が剣を振り上げた瞬間、レオンの足はすでに動いていた。次

いで左手は鞘を、右手は左腰に吊った剣の柄を握り込む。両眼は振り下ろされる剣の軌道を正確に捉えていた。

踏み出す低い体勢から、滑るように剣を抜き放つ。そのまま斜め上へ斬り上げる形で、振り下ろされる刀身の中腹目掛けて狂いない閃光の一撃が走った。耳をつんざくような金属音が響き、同時に火花が飛び散る。

圧倒的な速さと鋭さ——若男の剣は弾かれていた。無論、振り上げるよりは振り下ろす方が力が入りやすいのだが、レオンの剣はその差をまるで感じさせない滑らかな軌跡を描き、若男の剣を宙に吹き飛ばした。

回転しながら上空に舞い上がった剣の刀身が、陽光に反射してきらりと輝く——かと思うと、若男の背後と人壁の中間、その地面に突き刺さった。

静まり返る群衆。皆何が起こったのかもわからず、ただただ黙り込んでいた。当の若男も、いつの間にか空になった両手を見て言葉を失い、目を丸くしている。

奇妙な静寂が、周囲を支配していた。

かちり——沈黙を断ち切ったのはレオンだった。静かに剣を鞘に収め、依然として両手を呆然と眺めていた若男に再度警告の言葉を投げかける。

「やめなさい。これ以上の暴挙は許しません」

若男は「え？ え？」とかすれた声を漏らしながら、数歩後ずさった。あまりの唐突な出来事に頭が追いつかず混乱しているようだが、その目には理性が宿り、先程までの怒りはとうに消え失せている様子だった。

「わかりましたね？」

釘を刺す一言に、若男はようやく事態を察したらしい。地面に突き立った剣と自分の両手を交互に見比べると、またも距離を取りながら怯えるように数度頷いた。

「わかればいいのです」

レオンはふつと息を漏らした。とりあえずは一件落着である。
そのときになって、思い出したかのように人だかりがざわめき始
めた。

「何だ、今のは……見えなかったぞ」

「すげえ。やっぱ騎士団の者か？」

「いや、わかんねえ。何者なんだ」

注目の的は、当然のようにレオンだった。最初こそ混乱や疑問の
声が上がっていたが、やがて彼を褒め称える声に移り変わっていっ
た。レオンは苦笑いをして、その称賛に応える。あまり目立ちたく
はなかったが、この状況では仕方がなかった。

そんな中、先刻若男と争っていた例の中年男が近づいてきた。

「いやあ、助かったよ。ありがとう」

満面の笑みで礼を言う彼だったが、レオンにとっては決して気分
のよいものではなかった。結果はどうあれ、レオンは彼を助けたつ
もりではなかったからだ。むしろ――

「あなたもあなたです。礼儀を弁えてほしい」

横目でちらりと若男の様子を窺う。がっくりと肩を落とし、うな
垂れるその表情はまるで死人のように生気がない。

「もう少し冷静に対応できたのではないですか？」

むしろ、レオンは若男を助けたつもりだった。

もちろん、中年男も『魔術師』に対しての恨みを持っている――

その気持ちはわからなくもない。だが、だからと言って『魔術師』
たち全員を、その存在を侮蔑し、ましてその子までも目の敵にする
彼の考え方には納得できなかった。

「あれでは彼に失礼です」

同族を親に持つ彼を助けてあげたい。あるいは、それに似た慈悲
の念がその一言には含まれていたのかもしれない。『魔術師』排除
の風潮に対する反発の感情が、強く滲み出ていたのかもしれない。
「いや、すまねえな。ついカツとなっちまってよ」

しかし、彼には単に過言の意で捉えられたようだった。気に触れ

なかったのは結構だが、少しくらいは悟って欲しかったとも思う。

「以後からは気をつけてください」

そう言っ、レオンは踵を返した。これ以上の長居は無意味だろう。逆に目立ち過ぎれば、都合の悪いことになりそうな気がした。と言ってもすでに手遅れだろうが、とにかく早々に立ち去ることが最善に思われた。

だが、そうはならなかった。歩き出すことなどできなかった。

そこに『彼女』がいたのだ。

ずっと視界に入ってきた少女――目が合った途端、レオンの時は止まっていた。

第一章？

瞬間、レオンの体はまるで魔法にでもかかったように動かなくなった。日常から隔絶されたような空間の中に迷い込んだような、時間さえも止まったような、そんな不思議な感覚に支配される。

「え……」

思わず喉からこぼれ落ちたその言葉に、それ以上の意味はなかった。ただ目の前の存在に、そのひたすら奇妙な雰囲気吞まれた末に出た、無意識の反応。

レオンは半ば呆然と、周囲の状況も自分の立場さえも忘れ、ただ見入った。

灰色のコートに身を包み屹立する、その少女の姿を。

凜としてもなお澄んだ、瑠璃色の瞳を。

冷たく鋭い眼光が、真っ直ぐにレオンを捉えている。一切において氷のような冷たさを感じさせる少女が、ただ静かに、しかし圧倒的な異彩を放って存在していた。

その幻想的と言うにはあまりに強烈過ぎる姿が、レオンの心底にある何かを刺激する。周囲を取り巻く人だかりなど、すでに背景の一部に過ぎなかった。

腰元にまで伸びる亜麻色の髪が、風になびきさつと揺れる——途端、流れることを忘れた時が、再びゆっくりと動き始めた。

どれほどの時間、固まっていたのだろうか。気がつけば、彼女はレオンの目の前までやってきていた。レオンの方が頭ひとつ分ほど背が高いので、必然的に見下ろす形になる。

「おい、貴様」

不意に彼女が口を開いた。曇りのない、透き通った声音である。その声は辺りの喧騒にかき消されることなく、はっきりとレオンの耳に届いていた。しかし——

レオンは、依然として不思議な感覚の中にいた。彼女の存在が、やはり異質に思えてならなかったのだ。まるでそこにいること自体が不自然とさえ思えるほどの存在感。周囲との調和が取れていないような、ただ彼女だけがぼつりと浮き立っているように見える。

「貴様、聞いているのか？」

再度の呼びかけに、レオンははっと我を取り戻した。彼女の鮮やかな、しかし深みのある青色の瞳がこちらを見上げている。

「……ええ、何でしょうか？」

多少怖気つきながらも、レオンは何とか言い返す。十代後半かと思われる見た目の彼女であったが、そこにはその容姿からは想像もできない妙な威圧感を覚えた。

「あの男」

何を言われるのかと思いきや、彼女はただそれだけを告げると、

騒がしい群衆の隅でぐったりとうな垂れている例の若男を指差した。

レオンは首を傾げる。

「彼が、どうかしましたか？」

「あのまま放置しておいてもいいのか？」

「えっ？」

レオンは思わず素頓狂な声を上げた。

「そろそろ騎士団の者がやってくるはずだ。そうなれば、当然彼は捕まることになる。貴様はそれでいいのか？」

彼が捕まるのは当たり前のことだ。事件の当事者であり、街の条例に反して剣まで抜いた。無論、それはレオンも同じことだが、事を抑えるためにやむを得ない抜剣だったので、条例に記されてある「不用意な抜剣」には当たらない。

しかし、思うに彼女の言いたいことはそういうことではないらしかった。つまり、彼をこのまま捕まらせてもいいのか、ということだ。

「……どういことですか？」

彼女の意図が読めず、レオンは多少の警戒を持ちつつ聞いてみた。

「彼が『魔術師』の子だということを忘れたのか？」

レオンは短く、「あ」と声を漏らす。彼女の考えがようやく呑み込めた。

「——つまり、そういうことだ」

レオンの理解すらも悟ったらしい彼女は、ふつと口元に微かな笑みを浮かべる。

彼女の考えていること——それは、例の若男の受ける処分についてだ。

街中で剣を振り回した場合、通常ならば少額の罰金か、あるいは二、三日ほど牢屋に入れられる程度で済む。しかし、彼は『魔術師』の子だ。それを理由に与えられる刑罰が重くなる可能性も当然のよう to 考えられる。

とは言え、多少刑罰が重くなるほどならば大した問題ではない。規則に反したのは確かであるし、金を払うか牢獄で大人しくかさえすれば、いずれはもとの生活に戻るからだ。つまり、彼も『魔術師』たちと同等の、あるいはそれに近い扱いを受けることになるのではないか。彼女はそう考えている。もちろん、その可能性も否定できない。できないのだが——

「しかし、さすがにそこまでするでしょうか？」

もし彼が『魔術師』だったならば、おそらく二度と外に出られないことになる。それは彼らが危険な力を持つているからという国の危険視によるものだ。第一、『魔術師』というだけで捕らえられ監禁されてしまう。

しかし、彼は『魔術師』ではない。いくら『魔術師』を親に持っているとはいえ、彼自身は何の力も持たない一般人に他ならないのだ。危険ではないのだから、刑罰が重すぎるようなことにはならないはずだし、何よりなつてはならない。レオンはそう考える。

「いくらなんでも、それでは差別になってしまいます」

だが、彼女の瞳は揺らぐどころか、逆にひときわ鋭さを増した。「今の国の姿勢を侮ってはいけない。彼らは本気で『魔術師』とい

う存在を消そうとしている。そして、彼は仮にもその子供——つまり『魔術師』の血を引いているのだ。国はこの事件をいいことに、彼を重刑に処す可能性は高い」

言葉の節々から、真実味を匂わせる彼女の強い感情が伝わってくる。その威勢に圧倒されたわけではなかるうが、レオンの胸中に微かな不安が生まれた。彼女の意見を裏付ける、ある話を思い出したのだ。

約三年前、ヴァスティリア王国が『魔術師』排除の志向を固めたとき、国は『魔術師』本人のみならずその関係者——親や子は当然、配偶者やその他『魔術師』とある程度深い関係にある者さえ対象者にしようと考えていた。だが、さすがにやり過ぎだとの反発の声が多く、やむを得ず『魔術師』だけという今の体勢を取るようになった——そんな話である。

噂程度で流れていたとはいえ、もしその話が本当だったとすれば、重刑の可能性も決して低くはないはずである。

「そして、それは絶対に見逃してはならない問題だ」

断言する彼女に、レオンは全くの同感だった。

だが、ここでひとつの疑問が浮かんでくる。彼女はなぜ、そのことをわざわざレオンに提言したのだろうか。彼女の目的が、今ひとつ掴めない。

いや——レオンは小さくかぶりを振った。本当はわかっている。

つまり、彼女は彼を逃がすべきだと言いたいのだろう。それはレオンも同意見だった。規則に反した責任と刑罰との均衡が崩れた不当な判決が下される可能性があるのだから、彼を逃がすことに引け目を感じる必要はないし、むしろ当たり前とも言える。

しかし、レオンにはそれを行動に移す踏ん切りがどうしてもつかなかった。

彼を逃がすことは、言い換えれば犯罪者を許すことと同義ではないか。そして、それはすなわち法に背くということにはならないか。そんな思いが、レオンを思い留まらせる。

「ですが、可能性としてそこまで高いわけでは――」

だから、そんな本心からではない弱気な言葉が、つい口からこぼれて出てしまう。

「何を言っている。可能性の高さなど問題ではない。重要なのは、たとえ僅かでもその可能性があるということ。貴様を動かす理由は、それだけで十分なはずだ」

全くもってその通りだった。先程から彼女は、常に鋭い部分を的確に突いてくる。

「そもそも、この事件は不平等極まりない」

未だに騒ぎ立てる人ばかりを見回しながら、彼女は不意に切り出した。

「周りの人々をよく見てみる。誰が悪者扱いされている。間違いない彼だろう。対してあの中年男と言えば、まるで自分が被害者だと言わんばかりの態度だ」

不愉快に顔を顰めながらも、彼女は続ける。

「だが、実際はどうだ。事実として剣を抜き襲いかかったのは彼だが、だからと言って彼だけが悪いと決めつけられるわけがない。そもそも、この事件の発端はどちらにあった。話の流れから見ても、確実にあの男が原因だ」

彼女の推測は正しいと思われた。おそらく、若男が『魔術師』の子であると知った中年男が、それを理由に彼を罵倒したことからの事件は起こったのだろう。

「とすれば、両者とも悪いことになるだろう。中年男は私怨から彼を罵り、彼はそれに耐え切れず剣を抜いた。見方によれば、彼が被害者とも考え得る状況だ」

だが、これは彼女が若男に肩入れしているわけではない。条例に反して抜剣した彼も悪いが、そこまでに至らせた中年男も同じく悪いのであって、ゆえに彼だけを悪者と決めつけるのは不平等だと言っているのだ。

「周りの連中はそのことをわかっていない。特に彼の場合は、『魔

術師』の子だから、という理由で市民からより差別的な目を向けられることになる——」

そこまで言い切って、彼女は再度レオンに視線を向けた。

「実に不愉快だ。貴様もそう思わないか？」

もはや賛否を求める問いかけではなかった。答えなど決まり切っている。

「……当然です」

「ならば動け。貴様の手で彼を救ってやるべきだ」

彼女の意見はもつともだった。レオンは若男を救うために剣を抜いた。もし彼が中年男を殺していれば、極刑は免れないからだ。だが、結果として同じことになるのなら、わざわざ抜剣して助けた意味がなくなってしまう。どうせ事件に絡んだのだから、最後まで彼を救うことに努めるべきなのかもしれない。しかし——

やはり、レオンには決心できなかった。どうしてもその一步が踏み出せない。

「……そうか」

口籠るレオンを見て、彼女は呆れたようにふつと息を漏らす。

「貴様はまだ、縛られているのか」

その言葉は明らかに冷え切っていた。先程までの熱意の欠片もない。見限られたのだと、レオンはすぐさま察した。

「では私が動く。少しでも期待した私が馬鹿だったようだ」

そう言って歩き出した彼女を、レオンにはもう止めることができなかった。自身への苛立ちを抑え込むように、ぐつと拳を力強く握り締める。

簡単な決意——自分はそんなことすらできないのか。誰かを守るためなら、たとえ自分を犠牲にしてもやり通すのではなかったのか。あのとき、そう誓ったではないか。

だが、結局動けなかった。彼女の言葉に、素直に頷けなかった。「俺は何をやっているんだ……」

ふと思ひ至り周囲を見渡してみるも、彼女の姿はとうに消え失せ

ていた。今から探したところでもう遅い。すでに自分は逃げてしまったのだ。

間もなくして、騎士団の者らしき影がふたつほど、商店街の先に垣間見えた。

もはやここに留まる必要は完全になくなった。レオンは胸の奥につかえるわだかまりを感じながら、静かに広場を去った。

第一章？

ヴァステイリア王国が『魔術師』を危惧すべき対象と掲げ、迫害に至ったのは今から約三年前のことだ。戦後間もなくから懸念されていた問題だったものの、国王から直々に正式な発表が下されたときには、国中が混乱に陥った。何せ、それまで当たり前のように街で暮らしていた『魔術師』たちも、戦争には必須と言われていた魔術部隊の隊員たちも、とにかくそのすべてが捕らえられ、牢獄へと放り込まれたのだ。

当時こそ、国の至るところで反乱が起こった。首謀者は主に『魔術師』本人や彼らと深い関係にあった者たちである。しかし、それは結局のところ徒勞に終わった。『魔術師』がいかに強い力を持っていたとはいえ、そもそも数の少ない彼らが大勢の騎士に太刀打ちできるはずもなかったのである。

排除の決定から半年足らずで、すでにほとんどの『魔術師』たちが監禁されていた。運よく逃れた『魔術師』たちも、物陰に隠れ怯えながら生きるか、あるいは決死の覚悟で国からの逃亡を図るかなどの道しかなくなっていた。

そして現在から半年ほど前、捕らえられた『魔術師』たちの一部が、その腕にある術式を施されるようになった。それは国の研究者たちが独自に研究し、生み出したとされる「魔力を消す」術式である。

『魔術師』は、体内に『魔力』なる一般には持ち得ない不思議な力を内在している。彼らはその力を利用し、『魔法陣』など一種の条件を通して『魔術』を操るのだ。その原理は未だ不明であり、色々な仮説は立てられているが、はっきりとした答えには辿りついていない。

当然、『魔力』に至ってもその存在は謎に包まれたままである。にもかかわらず、国は突如として「魔力を消す」術式ができたと騒

ぎ立てた。

しかし、結果は無残なものだった。半年ほど経った今でさえ、成功例は皆無なのである。さらに、実験対象にされた『魔術師』は皆例外なく死んでいるというのだ。無論、これらの事実は一般市民には知らされていない。レオンが独自に入手した情報だ。

とにかく、今の国が何を考えているのかがわからなかった。

「我々が危惧しているのは『魔術師』本人ではなく『魔力』だ。その邪悪なる力を消し、彼らを救わなければならない」

そんな名目により、今もなお実験は続いている。だが、果たして国は本当に彼らを救おうとしているのだろうか。実験は、彼らを殺す口実ではないか――

レオンには、そのように思えてならなかった。

沿岸部に隣接しているがゆえ、大規模な港町でもあるルブランド。その活気は、日が暮れてもなお収まることを知らない。仕事を終えた商人たちや狩人たちが、一日の疲れを癒す恰好の場として酒場に集まってくるのだ。それぞれに杯を交わし、飲んだくれ、談笑を楽しむ彼らの様子は、日中のそれとはまた違った賑やかさがあった。レオンも同じく、溜まった疲労感とわだかまりを一時にせよ取り除くため、酒場へと赴いていた。淡い橙色が微かに洩れる半開きの扉から中に入ると、途端に酒臭さが鼻につく。しかし、この酒場特有の雰囲気は嫌いではなかった。

テーブルを囲み盛り上がる酔いどれたちを横目で見ながら、レオンは正面奥のカウンターに腰を下ろす。すぐさまマスターがやってきて、いつもの豪快な笑みを向けてきた。

「やあ、レオンさんか。いらつしやい」

大柄で実に頼りがいのありそうな体躯を持つ彼は、まさに酒場のマスターとして相応しい雰囲気である。しかし、その性格は見た目の巨軀に似合わぬ朗らかなもので、誰とでもすぐに打ち解け合うこ

とができる。ゆえに街の人々からの信頼も厚く、ルブランドに数店ある酒場のうち、この店だけは特に人気が高い。

「今日は何にするんだい？」

レオンは、手軽にシードルを注文した。気分としてはビール辺りを飲みたくもあったが、そこまで贅沢もしていられない。単に飲み慣れているからというのも理由のひとつだった。

注文を受けたマスターが、レオンから見て正面奥の壁にある、おそらくは貯蔵庫と思われる部屋の扉を開き、中へと入っていく。

レオンはその姿を見送ると、無意識のうちに店内を見回していた。騒々しく大声で話し合う者たちや、酔い潰れテーブルに突っ伏している者、興起になった酔漢たちに絡まれ苦い表情をする店の看板娘など、実に様々な人たちの姿が目に入る。そんなさんざめく光景の中、レオンはただひとつの姿を求め、一心に目を配らせていた。

シードルを運んできたマスターが、落ち着きのない彼の様子を見て小首を傾げる。

「誰か探している人でもいるのかい？」

その言葉にはっと我に返ったレオンは、思わず自嘲の笑みをこぼした。本当に自分は、何をやっているのだろうか。

「……いえ」

カウンター前へと向き直り、出されたシードルを一口啜る。すっきりとした林檎の風味が口内に広がった。泡立ちもきめ細やかで、爽やかな口当たりである。やはりこの店のシードルは、他店と比べても絶品に値するものだった。

「まあ、もし誰かを探しているんなら、気軽に声をかけてくれよ。俺たち商人は横の繋がりを大事にしているから、情報の回りもなかなか早い。この町の人間なら、大体はすぐに見つけられるだろうさ」
「ええ。ですが、大丈夫です。特に探しているわけでもありませんので」

マスターの好意は素直に受け取りつつも、レオンは小さくかぶりを振った。

杯を置き、ふつと息を漏らす。自分の執着心には呆れるほどだった。

一度出会っただけの、名も知らぬ少女――

その姿を、気がつけば探している自分がいるのだ。先刻としても、日中に起こった例の事件――その現場から抜け出し、一旦自宅へと戻ったまではよかった。だが、騒ぎが落ち着いたところに再び外へ赴いた途端、自分でも知らぬ間に行き違う人々の合間から彼女の姿を探していたのである。そして、結局見つかりもしないまま、今に至っているというわけだ。

実際、彼女をこの広い街から見つけ出すには、外見的特徴だけではさすがに情報が少な過ぎた。もちろん、マスターの言う通り商人たちの手を借りれば、案外簡単に見つかるかもしれない。しかし、そんな甘い利己的な理由だけで彼らの労を執らせたくはなかった。

そんな曖昧で中途半端な思いが、レオンを苦しめていた。そもそも、なぜ彼女と会いたいのか。その明確な理由が思い当たらないのだ。例の事件について何かしらの恩を返したいという気持ちはあるものの、それは自分の本意を騙し隠した上での無理矢理な理由づけに思えた。では本意は何か。そう自身に問いかけてみるも、答えは返ってこない。レオンは、自分の胸中にわだかまる感情の正体を依然として掴めないでいた。

この気持ちは一体何なのだろうか。改めて考えてみるも、答えは闇の中、結局は途方に暮れるだけだった。しかし、会いたいという気持ちは確かに存在するのだ。自分の真意がこれほどわからないのは、今までの人生を振り返っても初めてのことだった。

「……魔が差したか？」

レオンは小さくこぼし、シールドを勢いよく叩いた。とにかく、この気持ちは弊害しか生みそうにない。今は酔いを回すことで、感情の捌け口とするしかなかった。あまりの情けなさに、思わずとも溜め息が漏れてしまう。

そのとき、ふと背後から、きい、と扉の軋む音が聞こえた。

新たな客が来たのだろう——レオンは漠然としてきた頭でそう思い、半ば反射的に、しかもはや期待も持たず、ゆっくりと振り返った。

瞬間、はっとして息を呑む。目を疑いそうになった。

いたのだ。あの少女が。

灰色のコート。亜麻色の髪。そして何より、すべてを見透かすような鋭い碧眼——

間違いなかった。そこにいた彼女は紛れもなく、先刻会ったあの少女であった。

俄には信じられなかった。探していたとはいえ、まさかこんな形で見つかるとは思ってもいなかったのである。まさに運命的な邂逅とでも言うべきだろうか。

彼女は店内をざっと概観すると、そのまま店の隅にある空席のテーブルへと歩み、すつと腰を下ろした。遅れて店員がやってきて、注文を聞き出そうとしている。

レオンはその間も、ただ放心しながら、彼女の姿に目を奪われていた。

「どうしたんだい？」

不意に背中にかけられた声で、レオンははたと我に返った。振り返くと、マスターが怪訝な面持ちでこちらを見つめていた。

「……いえ、何でもありません」

レオンは愛想笑いを浮かべて、平静を装おうとする。しかし、マスターの目を前にして誤魔化しは通用しなかった。

「まさか、探している人ってのは彼女のことだったのかい？」

「えっ？」

驚きから出た無意識の反応は、もはや肯定したに等しかった。マスターが、やれやれといった感じで息を吐いてみせる。

「それならそうと、早く言ってくればよかったじゃないか。彼女はこの店の常連でね、毎日のように飲みに来てくれる。ここにいれば、探さなくてもいずれ会えたってことだ」

「そうでしたか」

レオンは苦笑して、彼女の様子を再度ちらりと窺った。静かに杯を手取る彼女は、やはり常軌を逸するような独特な雰囲気を感じていた。まるで別世界の存在の如く、周囲をおいてその姿だけが際立って見える。しかし、それはある種の輝きとは違った、逆に翳りの走る暗い部分からの存在感のように思えた。

何だろう——レオンは、またしても胸の奥に宿る何かが疼くのを覚えた。

「まあ、あの美貌だからな。追求めたくなる気持ちもわかる」

マスターも同じく彼女に目をやりながら、レオンと同調するように言った。

「違いますよ。そういうわけではありません」

首を振ったレオンに、マスターは朗笑する。

「それは失礼だった。しかし……ではどうして彼女を？」

「それは……」

思わず口籠る。彼女を探していた理由。それは彼自身が求めているものだった。

「実は、自分でもよくわからないんです」

レオンは、素直に話すことにした。隠したところで意味はないだろう。かえって話してしまった方が、少しは気持ちも楽になると思っ

った。

「わからない？」

「ええ。今日の昼下がりに彼女と出会った……というよりは、ちょっとした事件に出くわしましてね、そのときに成り行きで彼女と話す機会があったんです。まあ、特に何かがあったというわけでは……いえ、あるにはあったんですが、それからどうも気になってしまっ

って」

「それこそ、彼女に一目惚れしたってことじゃないのかい？」

マスターのもっともな意見に、しかしレオンは首を振った。

「それはないと思うのですが……」

無論、その可能性を考えなかったわけではなかった。正直、あのときもその美しさには思わず見惚れたし、その意味での好感を抱かなかったと言えは嘘になる。しかし、仮にそうして彼女に心惹かれたとしても、そんなあからさまな自分の感情に気づかぬほど、レオンも鈍感ではなかった。少なくとも、彼自身はそう思っていた。

「じゃあ、他に何か心当たりでも？」

「いえ……いや、わかりません。ただ、彼女を一目見たとき、その只ならぬ雰囲気——」

そのとき、レオンの脳裏に電光が走った。

ついに、彼女を探していた理由がわかった気がしたのだ。つまり、今まで感じたことのないような圧倒的な雰囲気と思慮深さを持つ彼女を前にして、勝手ながらもその素性を、何者なのかを自分は知りたがっているのではないか。

浮かんだ疑念は、すぐさま確信へと変わった。途端、胸中につかえていたわだかまりが、すっと抜けていくのを覚えた。

「——マスター」

頓に面相のよくなったレオンを見て、マスターがにと微笑む。

「何か掴んだようだな」

「ええ。おかげで助かりました」

「なに……俺はあんたから感謝されるようなことをした覚えはないよ。それより、何か聞きたいことがあるんだろう？」

レオンは感服した。さすがは酒場の主人として成功を収めているだけのことはある。彼の人を見る目は、すでに読心術を心得ているとしか思えなかった。

「ええ。彼女についてなんですが、何か知っていることはないでしょうか？」

「うーん」

腕を組み、唸るマスター。その表情から、微かに歪みの色が見て取れた。

「どうしました？」

「いや……まあ、何の仕事をしているのかはわからないが、何せあの美貌と、誰一人寄せ付けないような雰囲気を持つ彼女だ。素性が知れないゆえ、色々と噂は立つ」

「噂？」

「ああ。俺の口からはあまり言いたくはないんだが……そんないい噂ではないな」

渋面をつくった彼に、レオンは懸念を抱く。

「どういうことですか？」

「俺も詳しくは知らないんだが、何やら国の裏事情に関係しているとか何とか……」

「裏事情、ですか」

その言葉に、レオンは何か嫌な予感を覚える。

「ああ。いや……期待させておいてすまないが、これ以上店の信頼に関わる。それに、彼女はうちの大事なお客さんだ。あまり悪いことは言えない」

マスターは頭を掻き、すまないなと再度口にした。

「いえ、わかっています。おかげで助かりました」

レオンは簡単に礼を述べると、シールドを飲み干し、おもむろに立ち上がった。

第一章？

「もう行くのかい？」

「いえ、彼女と少し話をしようかと思ひまして」
「なるほど」

いささか憂色を示したマスターに軽く微笑みかけ、レオンは店の隅、彼女の座るテーブルへと歩み寄った。周囲からの視線が少しばかり集まったが気にもせず、おそらくは二杯目と思われる酒を飲んで、いた彼女の前で立ち止まった。

妙に自分の心臓が高鳴っていることに気がついたレオンは、思わず独り笑みを浮かべる。緊張を解くように、ふっと息を吐いた。そのとき、

「誰だ」

唐突に、彼女がこちらを見向きもせず、声を発した。警戒ではなく、威圧的な語調。レオンは思わず、先程とは違う意の笑みを口の端に刻んだ。

「……先刻お会いしたのですが、覚えていませんか？」

レオンの、あえての挑発的な物言いは、彼女の顔を上げさせるには十分だった。

「貴様……」

瑠璃色に輝く鮮烈な瞳が、僅かにだが驚きの色に揺れる。

「ええ。あの件では助かりました」

しかし、言下彼女の目付きが変わった。

「助かった？ 貴様は何を言っている。私は自分が思うままに行動したまでだ」

鋭い視線で睨まれると、それだけで戦ってしまうほどの迫力である。しかし、レオンは動じることもなく、その目を見返した。

「いえ、それでも助けられたことに変わりはありません。あなたの判断は正しかった。私はあのとき、つまらぬ葛藤に揺れていました」

もちろん、彼女の行動が絶対に正しかったとは言いきれない。悪事を犯した者を逃がさせ、ある意味で法に反したとも言える行為をしたのだ。それでも、レオンは彼女の判断は正しかったという結論を出していた。

「もしあのとき、あなたが動かなければ――」

「つまり、貴様は私に許しを請っているのか？」

レオンの言葉を遮り、彼女は確信を突くように静かに口を開いた。
「……わかりません。ただ、そのことをあなたに伝えたかった」

レオンも、それが意味のない言い訳だということは痛いほどわかり切っていた。どれほど丁寧に紡いだところで、彼女が納得するはずがない。だが、それでもレオンは、はっきりと自身の口から伝えなかったのだ。自分が間違っていたこと――その理解をもらい、少しでも見直される種を得たかったのだ。

「まあいい。それで、何の用だ」

彼女は視線をテーブルに戻すと、置かれていた杯を手に取りぐつと呷った。レオンはとりあえず、気になっていたことのひとつを聞いてみる。

「……例の男は、どうなりましたか？」

「何だ、そんなことか」

どうやら拍子抜けだったらしい彼女は、微かに口元を緩めた。

「大したことではない。私がどうするのかと聞いたら、もうこの街にはいられないから、どこか遠くの町へ逃げると言い出した。私に止める権利はない。それだけだ」

「そうでしたか」

逃げられるか否かは、およそ五分だろうとレオンは考えた。街を出るには、騎士たちが見張る大きな門を潜らねばならない。事件の情報がまだ伝わっていない早い間に動けば大丈夫だろうが、何せ彼も逃亡の身だ。手ぶらというわけにはいかない。そうなると、情報の伝達か、彼の行動か、うち早かった方に軍配が上がる形になる。
「無論、それ以上のことは知らない。私はただ機会を与えただけ。」

あとは彼次第だ」

彼女は言い終え、息を吐き出すと、再度レオンの方に目をやった。「聞きたいことはそれだけか？」

「……いえ、まだあります」

すると、彼女は思いもよらぬことを言い出した。

「なら、座つたらどうだ」

レオンは意表を突かれ、無意識に「え？」と気の抜けた声を発する。てつきり昼間の論議で見切りをつけられ、拒絶されていると思つていた。

「遠慮はいらない。私を女だと思わなくてもいい」

レオンの逡巡を、彼女は異性だからと勘違いしたようだった。珍しいことである。

とはいったものの、彼女の配慮はあり難く受け取ることにした。確かに、立ち続けているのは少々辛かったし、何より目立ってしまったのだ。

「では、お言葉に甘えて」

レオンはそう言って、テーブルを挟んだ彼女と体面になる席に腰を下ろす。すると彼女は「何か飲むか？」と突拍子もないことを聞いてきた。

レオンは訳がわからなくなった。どうして彼女は、急に心を許したような態度に変わったのだろうか。思い当たる節など全くなかった。

「どうした」

レオンの様子に違和を感じたのか、ふと彼女が疑いの目を向けてくる。

「いえ……」

すると、彼女は何か得心がいったように「ああ」と呟いた。

「ひとつだけ言うておくが、貴様の気持ちは理解したつもりだ。目を見れば、嘘ではないということくらいは判断できる」

レオンは顔を上げた。思いがけないところで、自分は彼女に認め

られていたらしい。嬉しさというよりも、安堵の気持ちが一番最初に胸を満たした。

そこでふと、レオンはなぜ自分がこんなにも彼女に受け入れてもらおうとしているのかを疑問に思った。考えてみれば、認められたところで大した益もないのである。接近を求めているのか——だが、答えはすぐに見つかった。つまり、彼女の考え方はレオンの信念に通ずるものがあり、彼女に見放されることは自分の信念の否定に繋がるように感じるのだ。

「わかったのなら……さて、何が聞きたい」
「そうですね——」

正直、質問したいことは山ほどあった。だが、いきなり踏み込んだ話をするのもいかなものだろう。レオンは腕を組み、頭の中を簡単に整理した。

「とりあえず、あなたが『魔術師』をどう認識しているのか、興味があります」

「なるほど。ということは、貴様は『魔術師』迫害に反対しているのだな？」

「ええ、その通りです」

今までの言動、態度を振り返れば、彼女に見抜かれることは何ら不思議ではなかった。

「その上で、あなたの意見を聞いてみたい」

レオンの純真な眼を受けた彼女は、ふつと微笑んでからおもむろに口を開いた。

「そうだな。率直に言えば、私は『魔術師』に対して何ら特別な感情は抱いていない。ただ、私は不条理なことが嫌いな質でね、一方的な理由で人が人を傷つけることが許せないんだ」

「ということは、あなたも『魔術師』の迫害には反対していると？」

「いや、そうとも言い切れない——」

そう言っただけで彼女は杯を持ち上げたが、どうやら空になっていたように、顰めた顔になる。すぐに店員を呼び、追加の酒を注文した。

店員がいなくなったのを見計らって、彼女は話を再開する。

「つまりだ。確かに『魔術師』の迫害は、国の一方的な理由により行われている。だが、『魔術師』たちはあの戦争のとき、何をした。戦争に直接関係のない他国の市民を、魔術部隊は自分たちの独断で殺したんだ」

それは事実だった。『魔術師』のみで構成され、精鋭部隊に次ぐ脅威を持っていたとされる魔術部隊は、戦争の状況が優位になり始めた八年前の初冬に、彼らの勝手な判断で他国の一般市民を虐殺した事件を起こした。

「あの事件に関しては、間違いなく彼らの責任だ。その点で考えてみると、彼らを危険と判断し、監禁している国の方針にも少し理が出てくる」

「しかし……」

抗議の声は、むなしく彼女の手によって制された。

「わかつている。だからと言って、『魔術師』迫害を認めるわけではない。正直、私はその現場にいた魔術部隊の連中だけならば殺されても構わないと思っている。だが、国はすべての『魔術師』を迫害の対象にしている。これは道理に合わない。ただの差別だ」

店員が運んできた酒を受け取り、そのままゆっくりと口に運ぶ。

「つまり何が言いたいのかというと……まあ、そうだな。私は『魔術師』迫害のすべてを否定しているわけではない。だが、全体として考えてみれば、否定せざるを得ない。そんなところか。これでいいか？」

レオンは頷いた。

「ええ。あなたの捉え方は、おおそ理解できたと思います。主観に囚われない、客観的でもっともな意見です」

しかし、その褒め言葉に彼女は首を振った。

「そんなことはない。私の意見とて、結局自分の考え方がもとに成り立っている。いくら客観的に物事を捉えようとしても、結果として人はそこに主観を入れざるを得ないんだ」

レオンは小さく微笑んだ。彼女の客観性には、改めて感心するしかない。

「やはり、あなたは優れた思考の持ち主だ」

「お世辞はよせ」

本心からの言葉であつたが、彼女は冗談と捉えたのだろう。軽くあしらうのみだった。テーブルの上に杯をそつと置き、長々とした息を吐く。

「さて、では他に何が聞きたい……と言いたいところだが——」

彼女はそこで一旦区切ると、一転して見抜くような目をレオンに向けた。

「そろそろ遠回しな質問はやめにしないか。私を気遣ってくれているのかもしれないが、貴様も疲れるだろう。もっと踏み込んできて構わない」

予想外な言葉——というわけでもなかったが、レオンは思わず吐息を漏らした。

「……さすがですね」

「あまり見縊られては困る」

にやりとほくそ笑む彼女に、レオンはどうにも敵わないと思った。

「では、率直に聞くことにします」

「ああ」

「あなたは何者ですか？」

瞬間、肝を抜かれたわけではなからうが、彼女の表情から微かに驚きの色が浮かんだ。しかし、すぐさまそれを収め、またしても杯を持ち上げ酒を喉に通す。

「随分と単刀直入だな」

「あなたがそのように聞くと、言いましたからね」

くくつと口元に笑みをこぼし、あからさまな溜め息をついてみせる。

「何者か……確かに疑われても仕方がないかもしれない」

「正確には、あなたがどのような仕事をしているのか。不躰だとは

「思いますか」

「ほう。気になるか？」

「ええ、気にならないと言えば嘘になりますからね。あなたのその身なり、立ち振る舞い、雰囲気……どう見ても只者とは思えません。では、一体何をしているのか」

「なるほど」

すでに自覚しているのだろう。否定の素振りは全く見せなかった。

「そうか……だが——」

途端、彼女は表情を引き締め、真剣な眼差しでレオンを見つめる。

「本当に聞きたいか」

「え？」

不意打ちを食らったレオンに、彼女は静かに告げる。

「興味本位で何かを探れば、その結果自分が後悔してしまうこともある。貴様はそれを覚悟の上で、私に聞いているのか」

真摯な彼女の眼差しに、レオンはぐっと息を呑み込んだ。次いで冷たい手が胸中を撫で、身震いするような空恐ろしい何かが膨れ上がってくる。

「覚悟しているのならば、再度聞くがいい」

彼女の言葉は、もはや告白と同義だった。その仕事をレオンが知れば、必ず後悔するだろうと彼女は考え、その上であえて警告しているのだ。だが、レオンも念頭になかったわけではなかった。マスターから聞いた噂と照らし合わせても、可能性として十分考えられる。

得体の知れない恐怖へと踏み出す一歩——しかし、レオンはもう迷わなかった。

「あなたが何者なのか——」

彼女の目を見返す。瑠璃色の瞳は、ひときわ鋭い光を放っていた。だが、その奥には翳りが滞り、相まって奇妙な色合いを浮かばせている。

彼女がどちらを望んでいるのか、その碧眼から読み取ることとはで

きなかった。それでも、レオンははつきりと自分の意思を口にした。
「私は知りたい」

彼女はすぐには答えなかった。何も言わず、ただただレオンの目だけを見据えている。何かを見定めるような視線。あるいは、何かを試しているような視線――

不思議な沈黙が、両者の間に流れていた。

互いに見合ったまま、時間だけが過ぎていく。レオンも目を逸らそうとはしなかった。逸らしてしまえば、そこで何かが終わってしまふ――そんな気がした。

やがて、彼女が諦めたようにふつと微笑む。

「……いいだろう」

彼女は言った。

「貴様のその意志、認めよう」

途端、先程まで漂っていた張りつめた空気が、まるで嘘のように消え去った。極度の緊張から解かれ、レオンは深い息を落とす。

すると、彼女は突然ぐいっとテーブルに身を乗り出し、レオンの耳元に顔を近づけた。

「明日、五番街の最奥、例の場所で待つ」

囁くと彼女は椅子に座り直し、ふと思いついたようにぐいぐいと酒を呷った。

「え？　どういことですか？」

一気に飲み干し、杯をテーブルに叩きつけると、彼女は呆れたように大息をつく。

「わからないのか。こんなところで話してしまえば、誰かに盗み聞きされる恐れがあるだろう。それとも、今すぐに知りたいと言うのか」

レオンは納得するも、それがまた恐ろしい感じがした。

「いえ、大丈夫です。では、明日ということでは」

彼女は頷くと、「さて」と声を漏らし、おもむろに腰を上げる。

「……では、私はそろそろ失礼させてもらおうか」

「わかりました」

しばらくして会計のため店員がやってきたので、彼女はコートの内側に手を入れ、数枚の貨幣を取り出した。そこでレオンは、ひとつ口を挟む。

「私が払いましょうか？」

その冗談とも善意とも取れる発言に、彼女はやっぱりと頬を緩めた。

「馬鹿言うな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8615i/>

碧眼と誓いの旅

2010年10月8日14時28分発行